

人的環境がユース年代におけるサッカー競技力の高低に与える影響に関する研究

～日本の大学男子サッカー選手における高校時代を中心に～

スポーツビジネス研究領域

5012A033-5 辛文

研究指導教員:原田 宗彦 教授

1. 序論

日本サッカーは、1993 年開幕した日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)を皮切りに、「サッカー不毛の地」(佐々木, 2008)から脱皮した。ヨーロッパの主要サッカーリーグへの移籍選手を数多く輩出するなど、日本サッカーの実力が世界から認められつつある。更なるサッカー強豪国になるためにはサッカー人材、特に競技レベルが高いユース年代サッカー選手の育成に負うところ大きい、日本の選手育成は他のサッカー強豪国の足元にも及ばないのが現状である(井上ら, 2004)。ユース年代サッカー選手の育成はもはや日本サッカーの国際成績の向上にとって避けて通れない課題となっている。

2. 先行研究

競技レベルの高い選手を育てるためには、タレント探索、タレント識別、セレクションと育成、といった4つの段階が必要である(William et al., 2000)。タレント探索と識別が練習者の身体形態測定などの不安定な要素に頼りがちであるため、競技力が高い選手の育成に与える影響力が減少している。ユース年代のサッカー人材の育成は、サッカー初心者または非熟達者をサッカー熟達者まで育てるという「熟達化」研究に関わることが多い。熟達化が10年間以上かかり(Ericsson, 1993)、こうした過程に対して、発達年齢という角度から各段階の特

徴に注目する研究もあれば(Bloom, 1985; Balyi, 2001)、過程を囲む外部環境に焦点を当てる研究もある(Henriksen, 2010; Gagne, 2000)。Bronfenbrenner (1979)が外部環境をマイクロ、メゾなどの4つのレベルで分類し、外部環境の影響力を強調している。

3. 本研究の視点と目的

本研究では、どのような環境が日本ユース年代のサッカー選手の育成に影響を与えるかという出発点で、マイクロレベル環境の中で高校時代における家庭、指導者、チームメイト環境という人的環境と競技レベルの高低との関係に焦点を当てた。本研究の目的は、①日本サッカー選手の高校時代における人的環境尺度を開発し、人的環境の現状を明らかにすること②家庭、指導者、チームメイト環境を含んだ人的環境の中で、高い競技レベルの獲得に影響を与える環境要素を明らかにすることである。

4. 研究方法

手順としては、人的環境を測定する尺度を開発し、因子分析によって人的環境をカテゴリー化する。続いて、ロジスティック分析を行い、各環境因子と競技レベルの高低と関係を検証し、統計上有意味な影響を与える環境要素を抽出する。

5. 結果

(1) 予備調査1

現役の大学サッカー選手に対して半構造化インタビュー調査を行った。結果、外部環境の重要性が検証され、3つの環境場面が高校時代のサッカー選手の生活とマッチしたことも検証された。

(2) 予備調査2

関東、関西の4つの大学の男子サッカー選手415名に質問調査紙を配布した。調査は2013年10月1日から15日まで実施され、366部の有効回答数を得られた。先行研究から日本サッカー選手の高校時代における家庭、指導、チームメイト環境と当てはまる項目を抽出するため、SPSS統計ソフトで主因子法によるKaiserの正規化を伴うプロマックス法で分析を繰り返した。その結果、「家庭環境」が12項目3因子で、「指導環境」が14項目3因子で、「チームメイト環境」が10項目3因子で構成されていることが明らかになった。また、日本の人的環境の特有の項目として新たな12項目が自由記述回答法によって抽出された。

(3) 本調査

予備調査2の問題点に対する改善策を講じた上で、人的環境尺度を開発するために、関東大学サッカーリーグの5つの大学のサッカー選手に質問紙を450部郵送した。実施時間は2013年11月17日から12月3日までであり、有効回答数は392部であった。その結果、①「家庭環境」が12項目「両親の関与環境」($\alpha = .84$)「非過度干渉環境」($\alpha = .64$)、「学業優先環境」($\alpha = .70$)という3因子構造、「指導環境」が17項目で「技術指導環境」($\alpha = .$

87)、「フィードバック環境」($\alpha = .88$)、「民主的な環境」($\alpha = .75$)、「言動圧迫環境」($\alpha = .82$)という4因子構造、「チームメイト環境」が12項目で「技術向上重視環境」($\alpha = .88$)、「平等・努力重視環境」($\alpha = .86$)という2因子構造が構築された。また尺度の構成概念を行なうために実施した確認的因子分析の結果によって、モデル適合度と妥当性は少々基準の値を満たしていないものの、すべての数値において許容範囲であることから人的環境尺度は採用に足ると判断し、以降の研究にも使用することとした。②人的環境9因子の中で「技術指導環境」、「言動圧迫環境」と「技術向上重視環境」が、レベルが高い技術の獲得に正の影響を与えることが明白にされた。

6. 考察と限界

まず、高校サッカー運動部における技術環境の不整備や体罰問題の深刻化という課題に対して、学校と連携し、高校運動部の指導者を再教育したりするような適切な指導体制の構築に取り組むべきである。次に、指導者にとって、自分の指導力の向上と互助精神に満ちたチームづくりへの工夫も凝らすべきである。また、サッカー選手がいる両親が子どものサッカー生活に積極的に関わろうと呼びかけたりする必要がある。指導環境またはチームメイト環境の全貌を測りきれないという研究不足、尺度の妥当性の担保、他の環境場面や直接に環境と関わる人物への直接的な調査という今後研究上の改善の余地が共にもたらされた。